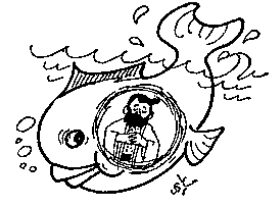


『ヨナの祈り』 (要旨)  
聖書箇所：ヨナ書2章1節～10節



### 【1】下によってどん底へ

ヨナは「主の御顔を避けて」自分で決めた目的地に向かいました。彼が目的地タルシシュに明るい未来を思い描いたかは分かりませんが、少なくともニネベ行きよりはましな歩みができると考えました。ところがヨナ書1～2章は、そうした彼の意に反して、彼が下へ下へと向かう様子を丁寧に伝えます。

「ヨッフアに下り」(1:3)

「船底に下り」(同5)

「海に投げ込まれ」(同15)

「よみの腹」へ(2:2)



我に返った時には、彼は「よみの腹」あるいは「よみの深み/底」(共同訳・フランス会訳)にいました。「よみ」(シェオル)とは死者が集められる所、真っ暗な場所を指します。そこで神様が讃えられることはありません(参照: 詩篇6:5, 伊ヤ38:18)。神様の臨在から離れた最終地点だと言えるでしょう。

「死においては あなたを覚えることはありません。よみにおいては だれが あなたをほめたたえるでしょう。」(詩篇6:5)

「主の御顔を避けた」ヨナは下へ下へと向かい、ついにどん底に行き着きました。振り返ってみますと、ヨッフアに下り船底に下りた時まで、彼は自分の裁量で「下り」ていました。しかしその後は、自分の力ではどうにもならない嵐の只中に置かれ、荒れ狂う海に「投げ込まれ」ました。海に投げ込まれた後は沈んでゆき、溺れて酸欠状態に陥り、もはやこれまで、と死を覚悟しました(2:3-6)。

彼は坂道で手放してしまったボールのように下って行きました。途中で引き返そうとしても、抗うことができずどん底に行き着いたのです。そして「よみの腹」で、自分が完全に神様から引き離されたことを知るのでした。

▷ヨナは自分で自分の人生の舵取りをすることができると考えました。そしてそのためには「主の御顔を避ける」必要があると考えました。

そうして彼は自由を得ようとはしましたが、現実にはそれと真逆の方向に向かわざるを得なくなったのです。

### 【2】どん底で祈った

さて、どん底まで下ったヨナに変化が起きました。以前船長に「あなたの神に祈りなさい」(1:6)と懇願された時には登場しなかった言葉が、初めて出てきます。それは「祈った」(2:1)という言葉です。

ヨナはどん底で「私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思い出しました」(2:7)と素直に告白するのです。主に祈ることをせず、主を忘れようとしたヨナでした。しかしどん底の苦しみの中で、初めて神に叫んだのです。この時彼の物事の見方に変化があらわれます。彼は自分で「主の御顔を避けて」いたと思っていました。しかし実は、自分が「御目の前から追われた」(2:4)者であったのだと。更に、彼は水夫たちに自分から「私を抱え上げて、海に投げ込みなさい」(1:12)と提案したつもりでした。しかし「あなた(神様)は私を…投げ込まれました」(2:3)と。彼はどん底で自分の歩みに関わっておられた神様を認めました。

### 【3】どん底で受けた恵み

ヨナがお手上げ状態となった一方で、神様はヨナを救うべく確実な手段を備えておられました。「主は大きな魚を備えて、ヨナを呑み込ませた」(1:17)のです。一命を取り留めたヨナは神様が自分を救ってくださったと認めます。そして信頼すべきお方は神様以外にいないのだと表明しました。

本来「よみ」は、神様を讃えることはできない所です。そこで神の「恵み」を期待することはできません。しかし神様は、そのようなどん底にいるヨナにさえ「恵み」を注いでくださったのです。

▷神様の「恵み」を受けるにはふさわしく無い。そう痛切に覚える時に、神様の「恵み」の大きさを知るので(参照: 肋18:9-14)。